

娘の彼に躰けられたマゾ母

鮎川 かほる

綾は娘の彼の若くたくましい男根に溺れてしまった。何度も抱かれ、絶頂を迎える綾にとって貫いてくる男根がすべてだった。加虐性愛も受け入れた。アナルセックスも躰けられた綾は若者の奴隷となった。娘の沙織もまた奴隷として調教されて、母娘は奈落の底に落ちていく運命となった。

着信したメールを確認した西野綾は胸のときめきを禁じえなかった。指示された時刻は午後4時だ。綾は保険の外交員をしている。新規に獲得した顧客への訪問予定がその前にあり、遅れて待ち合わせ場所の喫茶店に入った。

一番奥の4人掛けの席に江副睦夫の姿を確認した。綾は遅れたことをまず謝罪し、向かい合って席に座った。ウェイトレスにアイスティーを注文した。外はうだるような暑さだ。

「俺は、相当なサディストだと自認している。サディストの相手はマゾ女が最適だろよ。その点、沙織は合格点をつけられる。綾はどうだろうか。娘と同じように合格点をつけられるかな。マゾ女でないのならば、別れるしかないぜ」睦夫は平然と言っただけだ。

「…ひどいおっしやり方だわ」

「そうさ。おれはひどい男さ。娘を奴隷調教し、その上、母親まで奴隷にしたいと思っている男だからね。それがサディストの究極の願いだろうよ」

「それは危険な欲求よ。今でも危うい関係なのよ。あなた、娘も私も失うことになりますわよ」

「そうかな。綾はともかく、沙織はもう俺のこれから離れられないさ」

睦夫は股間を指さした。綾は視線を窓に向け、

「あなた、母親も奴隷にしたいのね……」

つぶやくように言う。

「俺好みの奴隷になりな。綾がそう誓うならこれからも可愛がってあげるぜ。ふふふ、きびしくね。いやならきっぱりと別れようじゃないか。おれはマゾに仕立てた沙織だけでいいからな」

睦夫がじっと見つめている。見つめられる綾の美しい顔がぽっと赤らむ。

「ひどい選択を迫るのね」

「さあ、どうする？」

「……もう……別れられない……」

「そうだろうよ」

「ええ、そうだわ」

「では、誓いの言葉を言いな」

「……ひどい人だわ……そしてわたしはひどい母親……それでも……あなたに抱かれない……」

綾はうつむいた。

「娘の恋人の奴隷になるというんだな」

綾はこくりとうなずいた。その刹那きゅっと胸が締めつけられ、娘を裏切っている罪悪感に襲われた。最悪感が全身を包み込んでくる。

ラブホテルの一室で、綾は下着姿になった。

「ぐっしょりじゃないか」

パンティに浮かんだ染みを睦夫に指摘され、赤面する。

「綾、抱かれる前から興奮しているんだな」

睦夫がパンティの中心部の縦筋を指でなぞってくる。綾は下半身をよじった。

「ええ、興奮しているわ・・・沙織の母親はそういう女です」

綾は唇を噛み、美しい顔をうつむかせた。

「ええ、興奮しているわ・・・沙織の母親はそういう女です」

綾は唇を噛み、美しい顔をうつむかせた。

全裸になった綾は、娘の恋人に抱かれた。睦夫の男根は、

肉の凶器と呼ぶにふさわしい剛直だ。睦夫は後ろから貫く体位が好みだ。ずんと貫き、抽送しながら綾の尻肉を叩くのだ。

「沙織に謝りな！綾は娘の恋人といけない関係になっている破廉恥な母親なんだからな」

ビシッと尻肉を叩かれ

「ごめんなさい、沙織さん、こんな母親でごめんなさい」と何度も口走り、とうとう綾は絶頂を迎えた。

「おまんこの締めつけがすごいぜ」

綾の膣奥に男根を打ち込み、睦夫も精を放つ。それは驚くほど大量の放出だった。

ぐったりと横たわる綾は息を乱し、股間からは睦夫の放った白い樹液が垂れている。睦夫との性交は常に中出しで、性交を重ねるうちにコンドームの使用は面倒だと言われ、避妊のため低用量ピルを常時服用していた。

「これで調教するぜ」

睦夫が見せたのは犬の首輪だ。

「それを…つけるの？」

綾は睦夫が手にした真紅の首輪を見た。大型犬用の太い首輪だ。

「沙織も首輪をつけて牝犬になって奉仕しているぜ。ママさんも牝犬になりな。淫らな牝犬にな」

「牝犬なんて…みじめだわ」

「沙織は牝犬にされるとおまんこをぐっしよりに濡らすぜ。

綾もじきにそうなるさ」

睦夫が首輪を近づけると、綾は艶やかな髪をかき上げた。